

映画の登場人物における日米の差異

1240404 江藤香梨

指導教員 三船恒裕

研究背景

文化心理学における東洋の相互協調的自己観とは、自己を社会の構成要素の一部とし、関係志向的であることを重視する考え方である。反対に西洋の相互独立的自己観とは、自己を他者から切り離されたものとし、個性的・自立的であることを重視する考え方である(Markus & Kitayama, 1991)。このような東西の自己観の違いが物語の登場人物の構成においても差異として表出されているかは未だ明らかではない。

研究目的

文化心理学の自己観理論に基づいて日本とアメリカの映画における登場人物の構成の差異を量的に比較して、東西の物語の文化差と文化的自己観理論との関連を検討することが本研究の目的である。

研究方法

日本とアメリカの商業映画の登場人物の構成を比較した。登場人物は新井(2023)を参考に5分類された。期間は2001年から2023年までを2年ごとに分けた。対象は年間国内興行収入1位の実写映画とアニメ映画の計48本である。

分析結果

独立変数を国の違いと映画のジャンル、従属変数を各登場人物の割合に設定して2要因分散分析を行った結果、国の違いの主効果が有意となり、日本映画($M=0.019$, $SD=0.027$)のほうがアメリカ映画($M=0.004$, $SD=0.009$)よりも準主人公クラスの脇役の割合が高いことが示された。したがって仮説1は支持された。一方で重要な脇役については国の違いの主効果は有意でなかった。したがって仮説2は支持されなかった。

考察・結論

日本映画はアメリカ映画よりも、主人公と密接に結びつく他者との関係を描くことで主人公を際立たせていることが示された。これは身近な他者からの期待や関係が重要な位置を占める相互協調的自己観(増田・山岸, 2010)と整合的であろう。ただし本研究の限界として新井(2023)に基づいた分類法のみを用いたことや、一人で分類を行ったこと、また制作費を含めずに分析したことが指摘できる。しかしこれらの限界がありながらも、本研究では東西の物語の文化差と文化的自己観理論との関連を支持するような結果が得られた。